

## 〔研究会例会報告要旨〕

## 1998年度第2回研究会

日時 1998年11月6日(金)

テーマ 「アメリカの中の『演劇』・演劇の中の『アメリカ』」

報告者 一ノ瀬和夫

## 〔報告要旨〕

演劇は成立条件として、公共の場である劇場と観客を必要とするため、諸芸術の中でも際だって社会状況と微妙な関係を常に持たざるを得ない。アメリカ合衆国の場合は、そもそもが移民の国であり多民族国家であるため、特にその事情は複雑になる。今回の発表ではこの事実を踏まえて、アメリカ社会の中で演劇がどのように位置づけられているのか、そして「演劇」はアメリカをどのように描いてきたのかを検証した。

勤労を尊び娯楽を忌避するピューリタンの環境を生き延び、独立戦争後によりやく市民権を得たアメリカの演劇であったが、19世紀末にはミュージカルの原型が出来上がり、商業資本と結びついた華やかなショー・ビジネスとして一気に開花して現在のブロードウェイ演劇が誕生する。つまりアメリカの演劇はまず、資本主義社会を生きる都市生活者の慰安として成立する。しかし20世紀になると、演劇を単なる日常からの逃避へと誘う消耗品ではなく、人間と社会の問題を考える場と捉える確固たる意志を持った作家たちが登場してくる。これが日本でもしばしば上演されるユージーン・オニール、テネシー・ウィリアムズ、アーサー・ミラーといった作家たちで、彼らはそれぞれアメリカ社会そのものと正面から対峙して、その矛盾や、人間心理の深層や暗部に切り込むことで、演劇が現実と渡り合うことのできる芸術でもあることを証明してきた。つまりアメリカ演劇はここで、娯楽性と社会性・政治性という二面を併せ持つメ

ディアとしてアメリカ社会の中に根付いたのである。このバランスは微妙で、どちらかが突出してしまうとアメリカ演劇としての魅力が失われるといったものであった。そしてこの絶妙のバランスの中から、日本でもなじみの深い『ウェストサイド・ストーリー』などのミュージカルは言うに及ばず、台詞劇においても多くの傑作、名作が生み出されたのである。

ところが60年代を境に演劇そのもののあり方に変化が起こる。そもそも60年代はアメリカにとって政治的、文化的、社会的のみならずそのメンタリティにおいても大きな変化があった時代だったが、演劇はこの流れの中で、前衛演劇、黒人演劇、フェミニズム演劇、ラテン系演劇、アジア系演劇という、それ以前の時代にはみられなかった、いわばマイノリティからの自己主張という言葉で括れるようなスタンスで時代に対応する傾向が顕著になる。その後、マルチカルチュラリズムとしてまとめられることになる現象であったが、この中でも特にゲイ演劇(同性愛演劇)は、他の演劇とはひと味違った切り口を持つものとして注目しておかなくてはならないものである。

と言うのも、ゲイ演劇が主張したのは、差別という意味で当然政治と社会に関わる問題であったが、同時に人間のセクシャリティを見据えたという意味で身体に関わる問題でもあった。そしてここで問題にされる差別とセクシャリティという視点は、人種というテーマを越える可能性を示すものであり得たのである。この点が特に重要であると思われるが、それは多民族社会アメリカが抱え、繰り返し問題化される民族間、人種間という二元論的対立構造を異化する可能性を含む視点と言えるからである。

つまり、マルチカルチュラリズムの流れは、ある種必然のものであるが、民族、人種という高度に政治的な要素は、時として個人の信

条や感性を抑圧するものとなることもある。  
その中で人間の身体を基本として政治に言及  
しようとするゲイ演劇の方向は、多民族の共  
存というアメリカが自らに引き受けた課題に  
対する一つの解答と言えるのである。